

第6回 先史時代のヒトと自然

魚津歴史民俗博物館

館長 麻柄一志

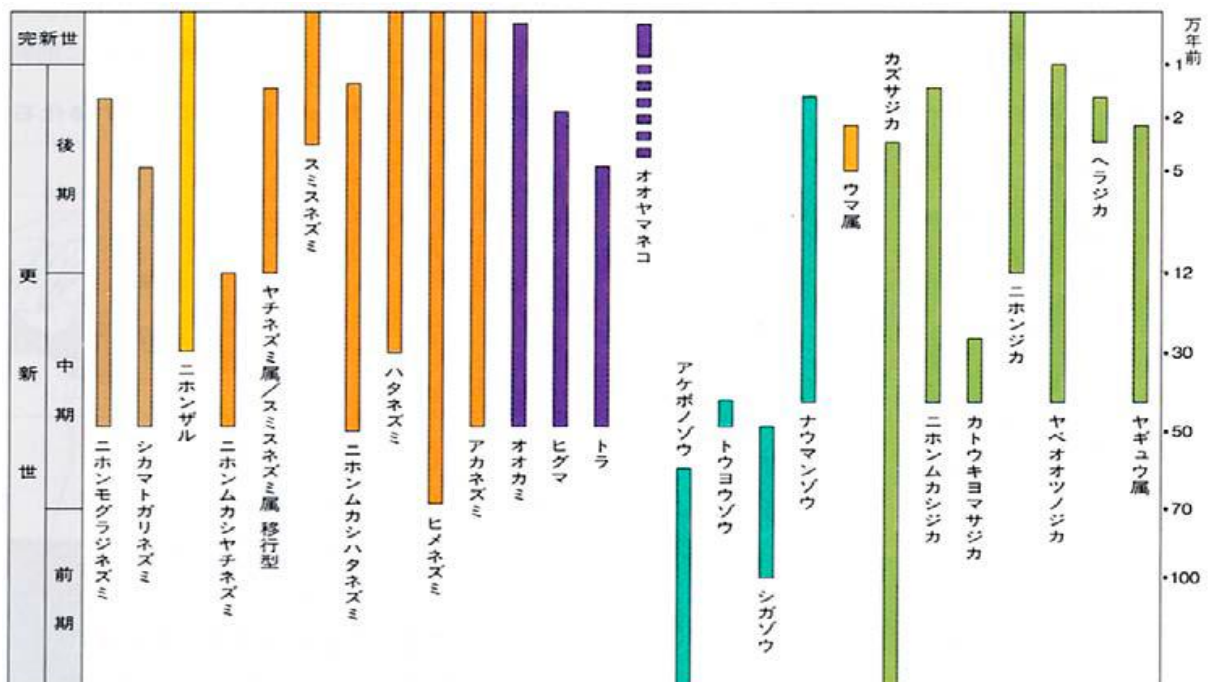
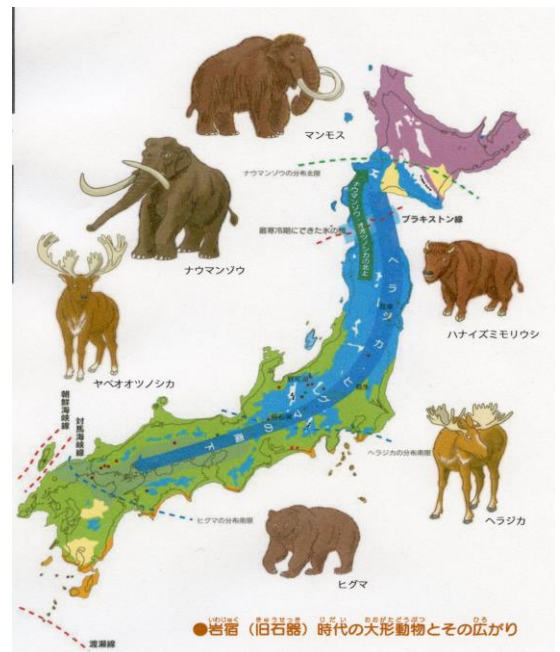
I 陸の動物

(1) 旧石器時代

富山平野へのヒトの登場は約38000年前に遡る。約20万年前にアフリカで出現したホモ・サピエンスは約10万年前に西アジアまで広がり、4万数千年前にはヨーロッパや東アジアに進出し、4万年前に日本列島に登場する。日本列島の4万年から1万6千年前は後期旧石器時代と呼ばれている。富山平野にはこの時代の遺跡が約150箇所発見されており、一定量のヒトの居住が認められる。

遺跡が集中する神通川や庄川の流域では同時代のナウマンゾウの化石も発見されており、河川に沿って移動するナウマンゾウが狩猟の対象であった可能性が高い。富山市（旧大沢野町）長川原と南砺市（旧平村）祖山からはいずれもナウマンゾウの臼歯が出土している。ナウマンゾウのほかにこの時代の日本列島に生息していた大型獣は、本州以南ではヤベオオツノジカ、ヘラジカ、ヤギウ、ハナイズミモリウシ、ヒグマなどが知られている。これらの哺乳類は富山平野にも生息していたと推定されている。

旧石器時代の人々は遊動する狩猟採集民であったため、遺跡からは住居跡のようなものは発見されておらず、簡易的なテントのようなものに住んでいたと想定されている。



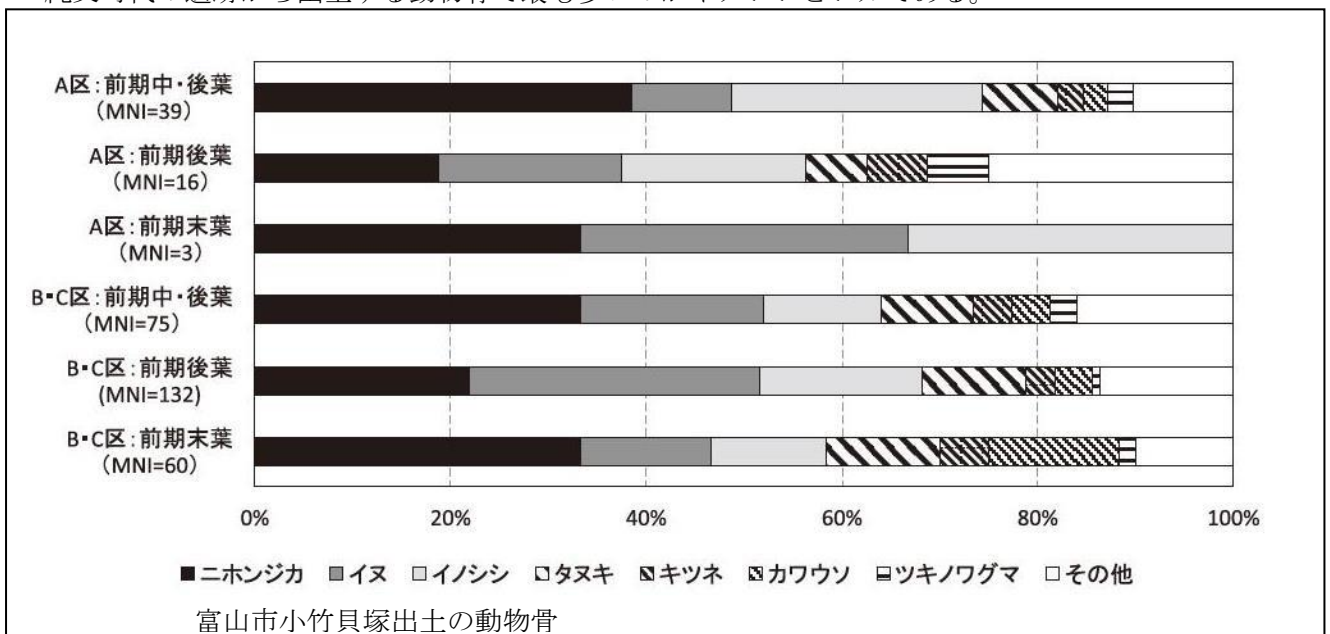
(2) 縄文時代

縄文時代の貝塚から出土する動物骨から、縄文人はシカ、イノシシを主にカモシカ、ツキノワグマ、タヌキ、キツネ、サル、カワウソ、ノウサギ、ムササビなど 70 種を越える哺乳動物が食料となっていたことがわかっている。食糧になったかは不明だが、オオカミ、オオヤマネコも縄文時代には生息。縄文時代にウシ、ウマ、ブタ、ヤギ、ヒツジそれにネコはいなかった。

ナウマンゾウなどの大型動物は旧石器時代に絶滅してしまい、縄文時代は中・小型どうぶつが狩猟の対象となった。そのため狩猟法は新しい技術が取り入れられた。

- ・弓矢 中小動物の俊敏な動きに対処できる弓矢の出現。狩猟の安全性が高まる。先端刺突部が軽量（草創期の狩猟具の分類では、大型槍 10～30g、小型槍 3～8g、石鏃 1～3g）
- ・落とし穴（陥穴猟）の始まり 陥穴は旧石器時代に出現。縄文時代早期の横浜市霧ヶ丘遺跡ではけもの道にそって約 120 基の陥穴が設置 陥穴の形態と構造は地域や時期によっても異なるが、長さ 2～3m、幅 1m 前後、深さ 1.5m～2m 程度のものが多い。
- ・罾猟 くくり罾などが考えられるが、発掘で具体的な痕跡を見つけることは困難。

縄文時代の遺跡から出土する動物骨で最も多いのがイノシシとシカである。



◎ニホンイノシシ

雑食性、行動範囲は広く、一晩で数 10km も移動する 親子や単独行動 1 回に 4～6 匹の子供を生む。鼻がよく利き猟には風下から近づくことが鉄則。猟には犬を使うことが効果的。体重 80～200 kg。本州、四国、九州、淡路島、小豆島に分布。本来棲息していない伊豆大島、八丈島、北海道などでも縄文時代に骨が出土している。旧説では足が短いので豪雪地帯にはいない、といわれていたが、北陸地方の縄文時代の遺跡から骨が大量に出土。20 世紀の富山平野には生息していなかったが猪谷、井口などの地名が中山間部にあるのでかつては生息していたと推定されていた。

◎ニホンジカ

ニホンジカはアムール川からベトナムまでの東アジア沿岸と日本列島に分布。日本列島では北海道から九州、その他多くの島々に生息。植物食性で群れをなして行動 1 回に 1 匹の子を生む。頭胴長 110～170cm 肩高 58～99cm 体重 50～130 kg。縄文時代の遺跡から出土する動物遺体の最大数量がニホンジカである。縄文時代の肉の供給源の最大量がニホンジカであったが、イノシシのように装飾

のモチーフになることはなかった。単なる食糧元扱い。

江戸時代以降の駆除で、北陸地方において一時的に絶滅していたイノシシとニホンジカは、近年復活し、害獣として農家に嫌われている。縄文時代には日本列島に広く生息。

◎イヌ

縄文時代の遺跡から出土する埋葬犬骨には、四肢骨に骨折・治癒痕が確認された事例も知られています。副木を用いた整復処置なども無かったとみられる往時、骨折したイヌは、猟犬としてはもはや使いものにならなくなったはずだ。にもかかわらず、骨折が治癒するまで生きられたことは、不具になった後もエサを与え続けられたことを意味する。この事実は、縄文時代人が少なくとも一部のイヌを、狩りの道具としてのみ見ていなかったことを示唆してくれる。もしかすると、彼らは一部のイヌを、共に生きる仲間あるいは家族同然の存在と考えていたのかもしれない。

富山県小竹貝塚では多数のイヌの骨が出土しており、骨格はほぼ完全に残っており、21 個体は埋葬されており、その他も含めて食べた痕跡はない。

縄文時代にイヌを食べた痕跡は認められないが、続縄文文化の北海道礼文島浜中2遺跡では食用にされた痕跡のあるイヌの骨が出土。同様に食糧にされたイヌは弥生時代の長崎県壱岐島原ノ辻遺跡など北部九州で発見されており、弥生文化と共に犬をたべる習慣が根付いた。朝鮮半島や中国では現在でも犬食は盛ん。『日本書紀』天武天皇5年(675年)4月17日のいわゆる肉食禁止令で、4月1日から9月30日までの間、稚魚の保護と五畜(ウシ・ウマ・イヌ・ニホンザル・ニワトリ)の肉食が禁止された。つまり、飛鳥時代は犬食が普及していた。



小竹貝塚の埋葬されたイヌの骨

(3) 弥生時代・古墳時代

縄文時代に捕獲されていた動物は弥生時代にも利用されているが、ニワトリ、ブタ、イヌが食用として加わる。古墳時代には耕作用、乗馬用としてウシ、ウマが中国や朝鮮半島から伝わる。ウシは5世紀に中国から主に耕作用として連れてこられたが、食用でもあった。675年天武天皇の食肉禁止令まで牛、馬も食べられていたことがわかる。その後も禁止令が、何度も出されており、肉食の習慣は廃れなかった。奈良時代・平安時代には牛乳を原材料とする蘇などの乳製品も食されていた。

ウマは乗馬(戦闘)用として、モンゴルから朝鮮半島を経由して日本に来た。しかし、大陸で用いられた戦車は伝わらなかった。日本列島には更新世に野生馬が生息していたが、ナウマンゾウやヘラジカなどと共に絶滅。5世紀からの馬具の増大で騎馬民族征服王朝説が提唱される。

魏志倭人伝には**其地無牛馬虎豹羊鶻**(その地には牛、馬、虎、豹、羊、鶻無し)と記され、魏志倭人伝が描かれた3世紀には倭の国には牛、馬、虎、豹、羊、鶻いなかったと考えられる。トラとヒョウは朝鮮半島に生息していたので、存在しない日本列島(倭)の特徴とみられた。

カササギは古代には日本列島にいなかったが、近世以降生息している。秀吉の朝鮮出兵(侵略)の際、持ち帰ったといわれている。ヒツジは6世紀から10世紀に百済、新羅、唐から献上、もたらされた記録があるが、明治まで飼育はされなかった。

II 海の動物

富山湾の海獣漁 遺跡から出土のクジラ類などの骨

富山県朝日町境 A 遺跡（北陸自動車道境 P. A）カマイルカとニホンアシカ（縄文時代中期～晩期）

石川県七尾市三引遺跡 哺乳類の骨の内、イルカ類 7.5%、鯨脚類 1.0%（縄文時代早期）

富山市北代遺跡 ナガスクジラ（縄文時代中期）

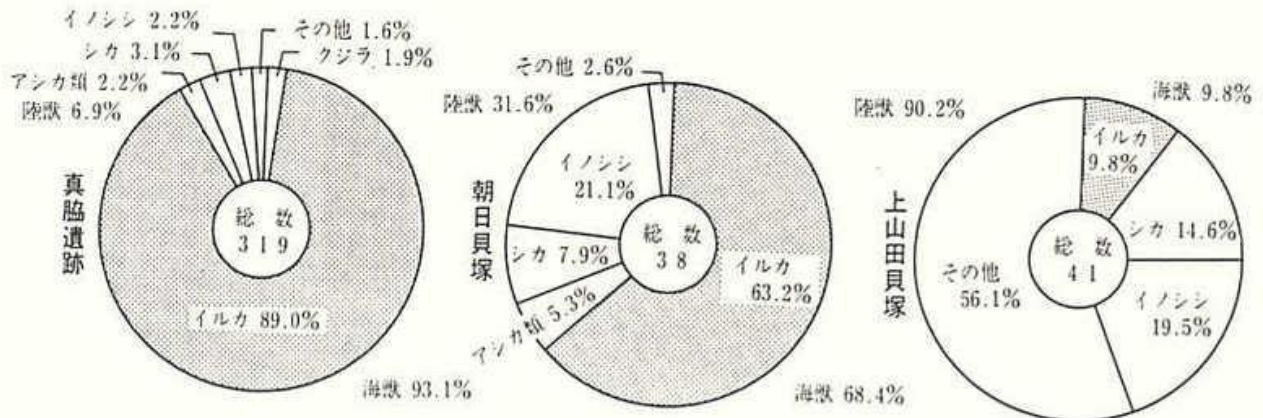
富山市小竹貝塚 シャチ、カマイルカ、ハナゴンドウ、ハンドウイルカ、ニホンアシカ（縄文時代前期）

富山県氷見市朝日貝塚 哺乳類の骨の内、イルカが 63.2%、アシカ類が 5.3%（縄文時代前期～中期）

石川県能都町真脇遺跡 哺乳類の骨の内、イルカが 90%（縄文時代前期～晩期）

氷見市朝日貝塚は富山湾で最も古くクジラ類の骨が確認された遺跡である。現在氷見市立博物館に保管されている資料では、少なくとも 24 頭を数えることができる。内訳は、マイルカ 17 頭、カマイルカ 3 頭、バンドウイルカ 2 頭、ゴンドウクジラ類 1 頭、不明 1 頭。この数は朝日貝塚出土のイノシシやシカなどの陸獣の 2 倍以上も多い数である。朝日貝塚の人びとは、富山湾に生活を委ねていたということになる。小竹貝塚でも、イルカ骨が他の獣骨より多い。

真脇・朝日貝塚・上山田貝塚出土の種別獣骨個体数率



小竹貝塚のイルカの骨

縄文時代にイルカ・クジラ漁を盛んに行っていた証拠が残されている地域は、富山湾岸以外では、北海道東部の釧路川河口付近と中央部の内浦湾沿岸地域、それに東京湾・相模灘沿岸地域、伊勢湾とその周辺がある。その他の地域でも沿岸部の貝塚等でクジラ類の骨が出土することがあり、イルカ・クジラ漁は珍しいことではなかったようだ。

弥生時代の捕鯨については、長崎県壱岐市の原の辻遺跡から出土した弥生時代中期の甕棺に銚を打ち込まれた鯨と見られる捕鯨図らしき線刻のあるものが発見されており、日本でも弥生時代に捕鯨が行われていたと考えられるようになった。

